

## マレーシア・サラワク州における森林管理・自然保護政策の推移

藤田 渡（総合地球環境学研究所）

### 研究の目的

現在、マレーシア・サラワク州では、本プロジェクトも含め、ランビルを中心とした生態学研究、及び、州内各地での村落における社会経済的研究が進められている。サラワクにおける持続的な森林利用を考える際、これらの調査研究に加えて、より上位の、州全体の政策との関連を明らかにする必要がある。このような観点から、サラワク州における森林管理・自然保護の制度の変遷と、その実施の様子、さらに、地域社会との関わりまでを明らかにするのが本研究の目的である。

### 2004 年度活動内容

ランビル国立公園内の生態学調査サイト、及び、その周辺のイバン村落を視察し、フィールドレベルでの調査地の概況把握につとめた。

クチンにおいて、サラワク森林局はじめ、関係機関において、森林管理や自然保護について、基礎的な聞き取り調査と資料収集を行った。

### これまでにわかったこと

サラワク州は、マレーシア連邦の中でも、ほかの州より特に強い自治権限が与えられており、森林管理についても、ほぼ、州政府の権限で行われている。いわゆる「科学的林業」の定式に従った伐採権の付与が行われ、おもに企業による商業伐採が行われてきた。このようなサラワクでの伐採は、「森林破壊」として、特に 1980 年代以降、国際的な批判にさらされてきている。特に、マイノリティであるプナンの人々らが伐採道路を封鎖し、大規模な反対運動に発展したことにより、広く、衝撃的に知られるようになった。

しかし、少なくとも制度面では、1956 年以前より慣習的に利用されてきた土地に対する「先住民」の権利、Native Customary Right は、土地法上、明確に保護されている。スハルト体制のインドネシアのように、「国民全体の利益に反しない限り」という但し書きもない。これは、実際に、かなり強固なもので、政府が一方的にこの権利を踏みこむような施策は行われていない。但し、元来、森林の中で狩猟採集によって暮らしてきたプナンの中には、この Native Customary Right が認められていない場合も多い。政策的に定住化（強制ではない）が進められ、農耕を営むものも増えたとはいえ、生計の林産物への依存度は高い。商業伐採による森林の劣化がプナンの生活に与える影響は看過できない。加えて、プナンは、イバンなど、ダヤク系先住民に比べ、人口規模が小さく、歴史的にもその社会経済的基盤が弱かった。このため、一応、民主的な政治体制下にありながら、ダヤクのように、議会に代表を送り、政策決定にその意思を反映させる道が閉ざされているという問題もある。

では、伐採そのものについてはどうか。サラワクの森林は、国立公園などの「完全保護区（Totally Protected Area）」のほか、「保護林（Permanent Forest）」、それ以外の州有地の中の森林、に大別できるが、原則的には、商業伐採が行われるのは後の 2 つである。その内、「保護林」については、持続的に施業されるよう、1973 年に FAO によって策定され

たガイドラインに沿って行われてきた。ただし、持続的なレベルが維持される生産量の算定に問題があったため、結果として、非持続的になってしまった、と森林局（現在は Sarawak Forest Corporation）の担当者は言う。国際世論の非難を受けて、1993 年以降は、総量規制も行っている。その結果、現在では、州内の伐採総量（年間約 600 万立米）は、ITTO が算定した量（年間 900 万立米）を大幅に下回っている。

このような施業計画の適用外であった州有地内の森林では、プランテーションへの転換も含め、特に収奪的な伐採が行われてきたとの指摘もされている。但し、現在、500 万 ha 強である保護林を 600 万 ha にまで拡張する計画であり、このほかに、完全保護区が 100 万 ha 指定される計画である。合計で州全体約 1000 万 ha の約 70% に達する。仮に、これらの持続的な管理が実現すれば、東南アジアの他地域に比べ、豊かな森林が残されることになる。現在、森林認証制度による持続的林業の認証を目指した、持続的森林管理スキームへの移行がまさに進められている。その成否が注目される。

国立公園など完全保護区の運営についても、近年、変化が見られる。地域住民の代表を交えた委員会を各保護区に組織され、運営についての意見交換が行われるようになった。これに対し、国際機関などによる支援プロジェクトも入っている。完全保護区以外の森林管理への地域住民の参加は、制度化されていない。但し、森林認証の要件の一つに地域社会への配慮があるので、住民主体というのは困難かも知れないが、伐採会社による住民へのサービス提供などは期待できる。

## 今後

以上が、現段階での文献調査・聞き取り調査による結果の概略である。サラワクの森林管理や土地問題は、政治的にセンシティブであり、資料なども開示されないものが多い。

今後は、現在伐採の中心地でもあり、いくつかの完全保護区もあるバラム川流域で広域的に森林管理・自然保護の現場レベル、及び、周辺村落での聞き取りを行い、実際に何が起こっているのか、丹念に事例を拾い出し、それを基にした関係機関でのより詳細な聞き取りや資料調査をも並行して進めて行く予定である。